

59 明治13年1月29日 菊池長閑

第二号一月廿九日記

到来物之挨拶草花の種類当時ニハ甚少其外野菜菓樹之実等取集
差越候格別珍らしき物もなし婦人ハ織物などハ慰ニ可成と存装
束類之小切を才覚いたし平絹類ハ左まで珍ら敷ものニも無之候

へ共皆服衣或ハ指貫袴等之裏なる故遣し穿整届たる分ハ縁エ書記し記さるも皆其類なり金紙織の類ハ錦或ハ能之衣裳や漆にてぬりたる如きもの二枚も袴等之裏也当時ハ此類容易ニ難得品物故古事家へ頼ミ或ハ従前御小納戸勤たる方を探し集たり其趣意知らざる人ハ甚微少之品と思ふへ笑ふへくと存申入候也扱返書認るニ甚当惑也近来写本も不致いと、難筆猶以階書六ヶ敷甚恥入たる事なれとも人頼ミて書しむるも却而信なきに似りと存自分認たる也

武夫殿

長閑

年立は勢ミの小川に鳩鳥のなきすわすれて春を待出東

こはお波之心を思ひやりて也

(封筒表)

「菊池 武夫 殿

(武夫注記)

(武夫注記)

「答済」

(同封 明治13年1月30日 菊池政國)

客年十二月十七日付尊書被下賜謹而奉読居候処益御壯建奉恐悦

候随而爰許御祖母様御始メ挙家無異罷在候間乍恐御安眠被下置度候扱又兼而御添慮頂度儀再度申上候処商法之道杯ハ御承知も被為在間敷殊ニ万里之外ニ御在身なれハ盛岡杯之様子も御分りありまし其儀も無恐再応御添慮を仰キ甚々恐縮之段不悪御了承被成下置度候何れニも商法向ニても營候筋ハ(先れニ不限)惣而父様之御添慮ヲ頂きて其業を始めへき心掛にハ候へ共兄様之御心付もあらハ之の上もなく父様ニ於テも兄様へも篤と相談致へく様被申候ニ付般万御願居候間必ス不悪思召被下置度候又御帰朝之上迎も多分東京ニ御在住被遊候思召なれハ殊更ニ御両親ハ勿論皆々様ニも御安意に為思召度日夜心苦罷在候へ共何も之れぞと思ふ心付も無之過日申上候鋳業会社ハ至極宜事と誰も申居候へハ父様ニも御相談仕候処至極御同意被下置猶父様も一條へ御依頼可被下置管ニ候間一先御安意被下置度猶出社之上ハ篤ト申上候県庁へ拾銭之日給ニ而役勤ハ好まぬ事ハ先昇庁ハ朝八時午後五時或ハ六時杯ニ退庁候へハ何ニも家の用ハ出来ぬ殊ニ寄れハ日曜日ニも出勤ス勉強ハ差置父様之御用も充分に務難き免角染の商法杯なれハ身も勝手ニ動き所より役勤ハ余り好まぬ事申上候間此儀篤ト御推察察被下置殊に何にも出来ぬ身なれ共父様の御手足ヲいたわり万分の一も御用ヲ弁し度処ハ役勤ハ好まぬ且此間も父様ニ会社之儀申上候へハ実ニ先れなれハ内の用も達する者なれハ誠ニ御祝之思召に御座候又父母への孝道ハ譬無学無文の者なれ共孝を尽しへき事ハ承知致居候へ共何分愚にして心の動きハ出来ぬ者か私にして心の中にてハ其の道ヲ尽し事ハ思へ居候へ共外に願われさりのハ私の不幸何れにしても

父母を大切にするハ子の道なれハ仰の如ク猶一層尽しへし又朋友ニも善人ヲ撰ミ交ヲ結可申御尊書中御添慮之段謹而御礼申上候余後便猶御報可申上候謹言

一月三十日

御兄様

菊池政国

再白過日申上候氣候とハ違ヒ此頃ハ雪も節々降り寒気も思の外敵き旧冬ハ雪も不降寒気も至て緩やがなれハ土民共又々心配の様子申居候処新年ニ相成候へハ先当年も作ニハ間違無きかと存居候何れにも帰朝已而待上候ハ乍恐多きも宜敷申上候

(封筒表)

「御兄様」

(封筒裏)

「菊池 政 国」

(同封) 明治13年1月12日 菊池澄

御兄様

澄

新年慶賀四海同一先以テ御安寧御迎歳被成候段奉恭喜候次ニ当家御祖母様ヨリ不肖ニ至ル迄無恙加齢仕候乍憚御省慮可被下候右履端ノ御吉驗申述度為呈片猪候恐惶謹言

猶以テ昨年ハ時々御動作モ伺ハス御無信恐懼ノ至り何卒御海恕奉仰候学業勉励ノ義命ヲ蒙リ候処昨年夏ヨリ耳不利聾同然トナ

リ学校怠り五六ヶ月余薬用其驗アリテ全偷仕猶出校致候処又々前症ニ立帰り爰ニ於テ脳病ニナランコトヲ恐レ御父様ノ仰ニテ退校仕候然り兼々ノ御教示モ有之読書洋算ハ山本縁先生ニ就テ学ヒ居候御安心被下度候以上

一月十二日

(封筒表)

「御兄様 澄」

(封筒裏)

「明治十三年

一月十二日」